



「上げ」「下げ」を決定する3つの判断方法を知ることが先読みのコツ

■ どこで下げ止まったのかを見極めるには

今回、一目均衡表図表について解説しますが、それに先立って次のことを理解していただかねばなりません。

相場の方向性を判断するときに、何によって「上げ」「下げ」を決定するのかを整理しておく必要があります。一目均衡表の場合大きくは3つの判断方法に分けることができます。

(1) Aまで下げきった→だからA以降上げる (図1)

もしくは

Aで一応の下げ止まりである→だからA以降上げる

(2) bAは押しである→だからA以降上げる (図2)

(3) Aは相場水準Xよりも下位にある
→Aよりも下げることがあるかもしれないがやがては上げる (図3)

(1) の場合3波動Nによってこの判断を導きます。ただし単なるNの完成では充分ではなく、前回説明した中間波動によって、下げの影響力が消えつつあることを確認し、さらにその後の均衡表好転によって下げ止まりを判断できるのです。

図4を御覧ください。AからDまでの下げの3波動Nによって、ABの下げの償却が終わったことは直感できますが、この3波動を見ただけではD以降、CDを第一波動とした下げのN、ADを第一波動とした下げのNを形成する可能性を否定できません。

CからFまでP波動（中間波動）を形成し、DからFの底値固めはじめてADの下げ、CDの下げの影響力を考えなくとも良い状態になります。

このような状態になってからの均衡表好転（図表については後で述べます）はDを出発点とした上げの3波動Nを形成しつつあることの証明でもありますから、ここでやっとDが下げ止まりと判断できるのです。

実例を挙げてご説明しましょう。図5は実際の日経平均株価の月足1989年12月高値から1992年8月安値までの均衡表グラフであります。AからFまでの過程は図4と同じ形であることにご注意ください。

AからDまで5カ月下げ、3カ月上げ、5カ月下げ、という下げのNを形成後、6カ月上げ、6カ月下げでFとなっています。FはDの安値を割っていませんのでCからFまで中間波動P波動であると認識できます。

DからFまでは11カ月でADの下げ11カ月に対応しています。さらにEFの下げ6カ月はCDの下げ5カ月に対応すると同時に、DEの上げ6カ月の対等数ですから、Fからの上昇は充分期待できるものであります。

もしも、F以降均衡表が好転し、各線が押し目として働くことが確認できれば、一応はDを底と見てよい相場がありました。しかし実際にはGまで3カ月上げて先行スパン下限と転換線を越えてきたものの、次の月には直ちに割り込んでいます。

この場合、逆に「Dを割り込むのも時間の問題」という判断に変らねばなりません。Gがもみ合い相場の下放れのポイントとして働くいたことを強く示唆しているからです。いったん先行スパンの下限を割り込んだ相場が立ち直ることは容易ではない。ということもその理由の1つです（その意味ではFも決してよいとはいえないが）。

A以前の相場は2万1036円安値を出発点として26カ月の上げ相場でありました。Aの天井を中心としてその対等数をとれば、H1992年1月がそのぎりぎりのポイントです。AD11カ月=EH11カ月、EF6カ月=FH6カ月ですからHはFと同様重要な分岐点がありました。

■ 動く相場と動かない相場では受け取り方が違う

さて、ここで注意していただきたいのはAからの下げにおいてC、E、Hの高値が均衡表のいずれかの線で頭打ち（戻り高値）となっていること、DからHまでの中間波動（もみ合い）においては必ずしも押し、戻りとして働くいていない（FとG）ことあります。

前回動く相場（方向性を認識できる相場、基本波動N）と動かない相場（もみ合い相場、中間波動）とに分けて説明しましたが、一目均衡表の図表の受け取り方はこの両者で決定的に異なる 것입니다。

(2) の判断は言うまでもなく(1)の判断があつてはじめてなり立つものですから、上げか下げかの方向性は既に認識していることになりますが、この場合においては、均衡表の各線を押し、あるいは戻りのポイントとして活用します。

(3) の場合は要するにもみ合い相場でありまして、均衡表のいずれかの線を一種の相場水準としてみなしているのです。前回述べましたようにもみ合い相場も結局は3波動として認識される事になりますので(1)の判断がはるかに重要度は高いものであります。

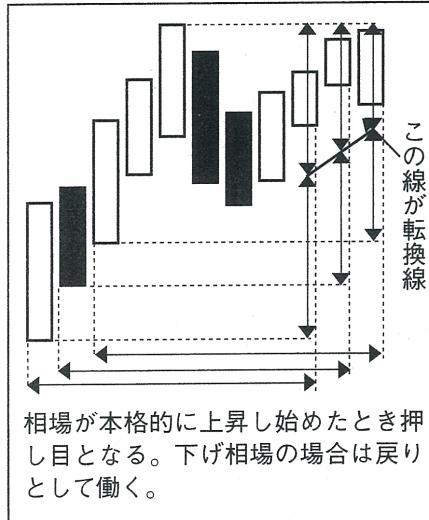
図6は一目均衡表月足の2003年4月か

ら2004年5月までのグラフです。この相場変動において、一目均衡表の各線が押しの限界として働いている場所と、機能していない場所がありますが、機能していないところは期間を限定して見ればもみ合い相場です。

今回は均衡表各線の作成方法を述べるにとどめて、次回その具体的な説明をいたしますが、均衡表の各線は波動との関わりにおいて重要な意味を持つ、むしろ互いに補い合う不可分の関係であるということだけ理解してください。

【一目均衡表ことばの解説】

転換線：過去9日間の高値と安値の半値を日々つなげた線。



基準線：過去26日間の高値と安値の半値を日々つなげた線。相場の基準線として特に重要。

基準線の向き（上か下か）は場合に

よっては判断の決め手となる。

先行スパン上限：基準線と転換線の半値を26日先行させた線（変動の仕方によって位置を変える）。

先行スパン下限：過去52日間の高値と安値の半値を26日先行させて記した線（変動の仕方によって位置を変える）。

遅行スパン：日々の終値を26日前に記して記入した線。

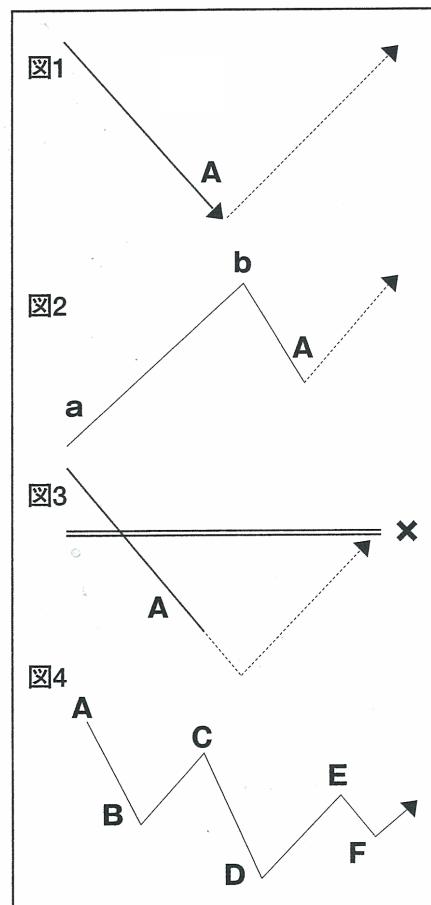


図5 日経平均、月足一目均衡表

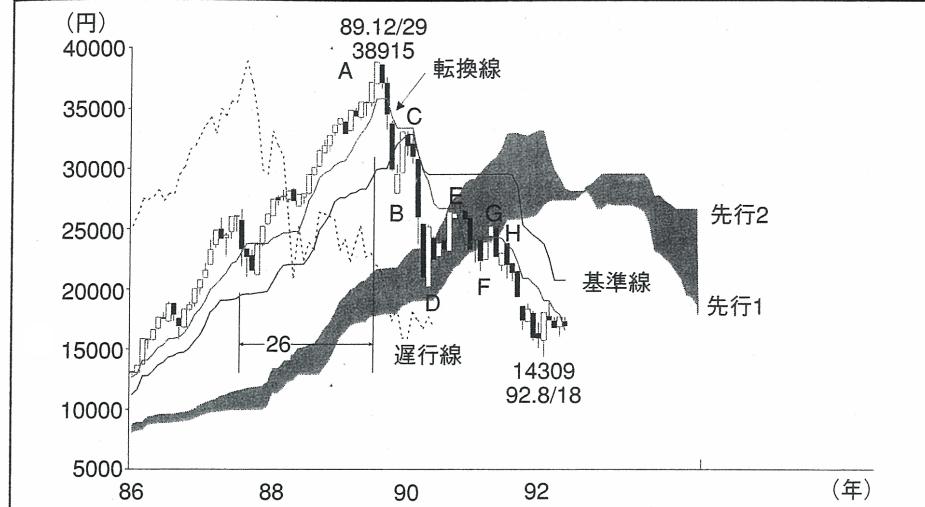
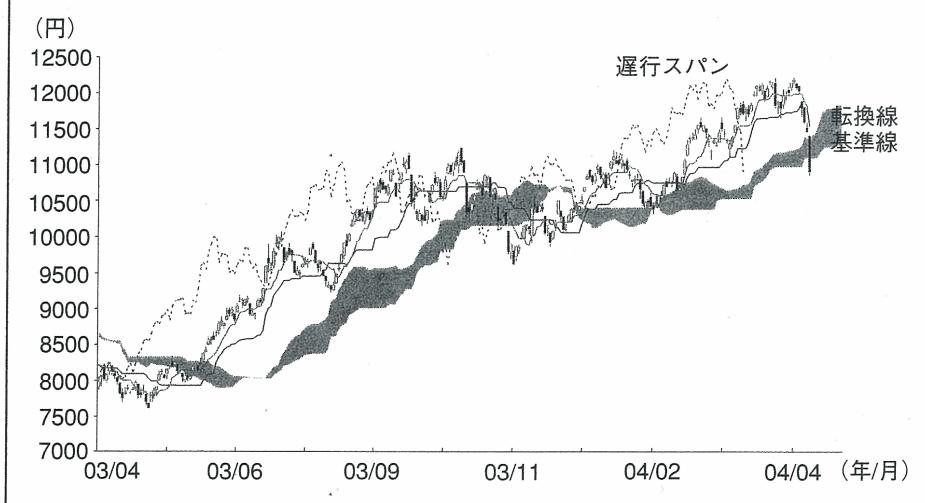


図6 日経平均、一目均衡表（日足）



●一目均衡表初心者用講習会のお知らせ

2004年月1回程度、一目均衡表の初心者用講習会を開催予定です。詳細はホームページ上で告知いたします。経済変動総研にお問い合わせ下さい。

一目均衡表公式ホームページ
<http://ichimokusanjin.hp.infoseek.co.jp/index.html>



直感を確信に変える 波動論活用が重要な 先行き判断法

■ 「押し」か「戻り」の機能を 見極める

前回、相場の方向性を、どのように判断すべきかについて述べ、均衡表図表の簡単な説明をしました。方向性の判断方法について自覚しておくことは、後日解説予定の「変化日」を理解するうえで極めて重要です。もちろん、均衡表の図表を活用するうえでも深い関わりがありますので、ご自身で納得いくまで研究してください。

一目均衡表については前回、次の2点を御理解いただいていると思います。

- (1) 上げ相場においては、一目均衡表の各線は押し目として働く。下げ相場では逆に、戻りとして働く。
- (2) もみ合い相場では、一目均衡表はもみ合い相場の中心的な価格帯として

働く。

皆さんがグラフを見たときに、まず一番初めに確認すべきことは、均衡表が、押しとして働いているのか、戻りとして機能しているのか、それともそのどちらでもないのかを、見ることなのです。

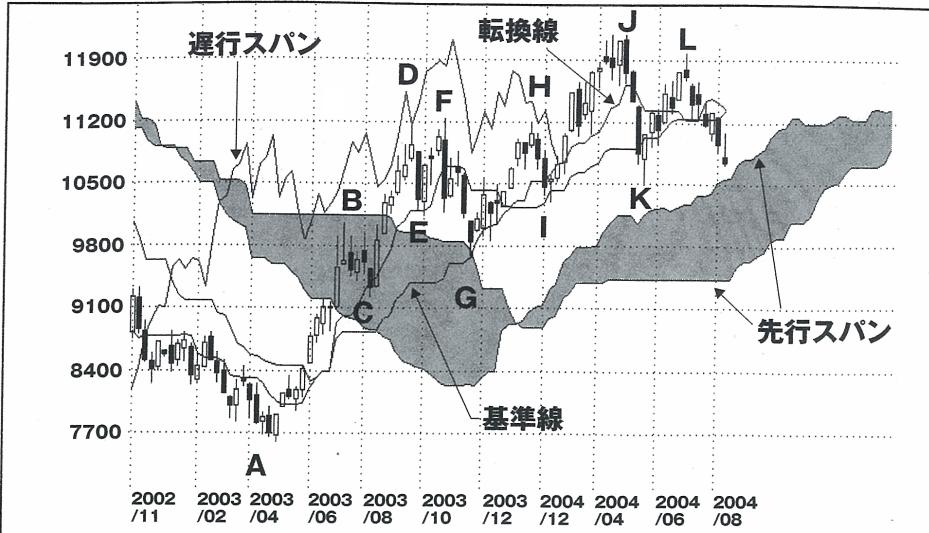
図1を御覧下さい。これは2003年4月安値7603円Aからの平均株価週足の一目均衡表グラフです。安値と高値にはA～Lまで記号がふってありますが、Jは2004年4月高値1万2195円、Mは8月13日現在ということになります。

C、EはA～Fまでの上げ相場での押しですが、それぞれ転換線の位置で反発しています。GはA～Jまでを上げ相場と見た場合の押しで、先行スパンと基準線が交わっているそのポイントで反発しています。

同様にIは基準線の位置でやはり押しであります。ですから均衡表が押しとして機能しているから、上げ相場である、と直感的に判断することが、Jまでは出来るのです。(一目均衡表のいちもくという言葉の意味は、ひとめ見て分かるということです)。

しかしJの位置で、これから上げ相場である、と判断するのでは困るので、今、説明したような段階での図表からの判断はあくまでも勘の範囲を出ないのです。それではどのように直感を確信をえていくのかは、これまで何度もご説明したように波動論を活用します。

図1



上げ相場は結局3波動Nを形成する、ということから、相場変動のあり方を想定するのです。上げ相場はNもしくはNの連続として捉えられますので、均衡表での反発は、Nの形成を強く示唆するのです。

たとえば、A～Bまで11週上げて、Cまで5週下げた位置が均衡表の転換線と重なっていますから、Cから反発した場合はCから7週(Bを中心としてAB11週をBから数えるとCから7週目)、11週(ABの時間をCから数える)、15週目(AからCまでの時間をCから数える)までは上げると想定出来るでしょう。

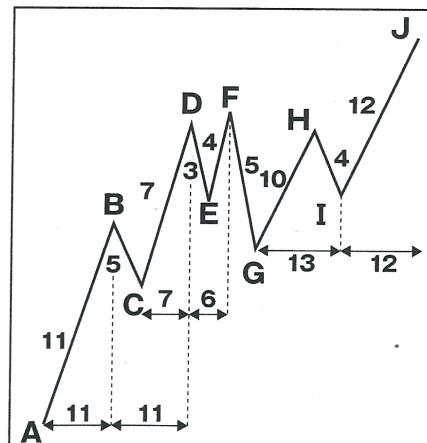
実際の相場変動が、想定しておいた変動と違う場合ははじめの直感的な判断が間違えているわけで、その場合は新たに直感し直す、ということになります。

■ 上げ下げという事実が その後の方向性に影響

図2は図1の変動を簡略化して時間関係を載せてあります。

図1と、図2をよく照らし合わせて良く考えていただきたいことがあります。上げ相場には、その時々の押し目

図2



の限界がある、という捉え方についてです。

つまり一目均衡表の考え方は、上げたという事実、下げたという事実そのものが、その後の方向性にもっとも影響を与える、というものであります。その意味では図1のC、G、Iなどは上げ方向、下げ方向のどちらも考慮してよいポイントである、ということなのです。

このような考え方は、少なくとも山人以前の相場師は当たり前に持っていたものでして、半値戻し、三分の一押しという言葉は現在でも残っています。

一目山人の偉さはこの押しと、戻りの感覚的な理解の仕方をはっきりと捉え直したことになります。つまりある期間における半値が押しか戻りかを見るのに最適ではないかと考え、整理し直したのです。

さて、これまで書き方のみ述べましたが、これからは転換線、基準線、先行スパン（52日間の半値を26日先行させたもの）について解説しましょう。

昔からいわれている、半値戻し、三分の一押し、とは次のような意味であります。

1) ABまで上げたものが、Bから下げ始めたとき、ABの上げ幅の三分の一下げたCの位置は上げ方向に反発しやすいポイントである。（図3）

2) ABまで下げたものが、Bから上げ始めたとき、ABの下げ幅の二分の一

図3

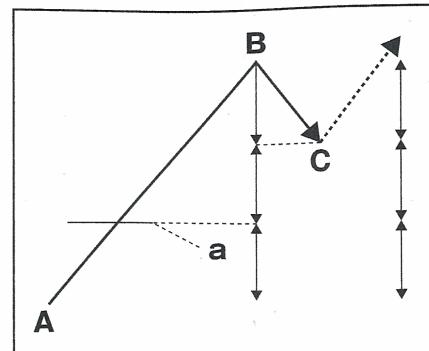
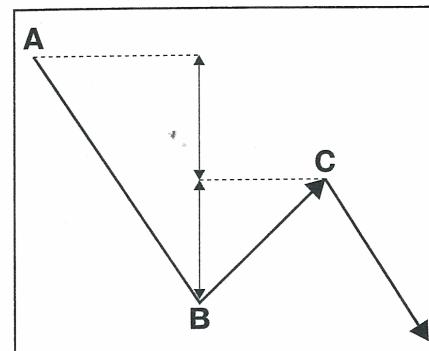


図4



上げたCの位置は下げ方向に反転しやすいポイントである。（図4）

これは当たるときもあれば、当たらぬときもあるという、確からしさに欠ける経験則なのですが、一目山人は当たらないのは時間関係を無視しているからである、と考えたのでしょうか。

図3でCはABの三分の一であります。が、aを出発点とするならば、aBの半値の位置にあたります。相場変動における価格は、売り手と買い手の一一致点であります、その意味ではどの場所も相場を考える起点になりえるのです。

ですからaを起点にする事自体は決

して矛盾しておりません。つまり上げ相場もまた半値関係であり、ある期間における半値関係を見るということです。

これは波動論から見ても同じことがいえるのですが、図2を見れば分かるようにAを起点として考えなければならない期間は限定されています。

相場変動が進むにつれ起点としての意味が薄れ（後で生きてくる場合もありますが）CやGを起点とした3波動Nを形成しています。

つまり転換線、基準線、先行スパン（52日の半値を26日先行させたもの）の3つは短期、中期、長期の半値関係をみるものである、ということです。

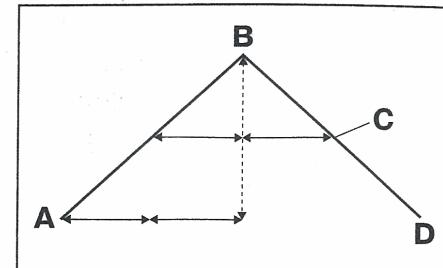
少なくともこの3本の線は波動論と切り離して考えるべきではないのですが、これは次のような意味があります。

図5を御覧下さい。先ほど上げた事実、下げた事実そのものが相場の方向性に影響を与えると述べましたが、もしも方向性を形成しないとするならば、次のように考える事が出来るでしょう。

AからBまで上げたものはBから同じ時間、同じ値幅だけDまで下げる（つまりABの半値を中心としたもみ合いを形成する）。

このAからBまでの日数に基本数値を当てはめてA～Cまでの日数を見ていただきたいのですが、ABを17日としたときにA～Cまでの日数は25日、つまりCの位置は基準線（26日間の半

図5



値関係）に相当するものであります。

AB51日としますと、A～Cは76日ですが、Bからは26日となりCは先行スパンに相当します。

一目山人が均衡表を発表する以前のノートには基本数値（9、17、26、33、42など）における半値関係が細かく記入してありますが、実は転換線、基準線、先行スパンは9、26、76という基本数値でもっとも重要な数の半値関係であるということです（先行スパンはもちろん76の半値関係とは違った動きをする場合がありますが26日前に見当をつけておくことに意味があるので）。

次回は遅行スパンと先行スパン（基準線と転換線の半値を26日先行させたもの）についてご説明します。

●一目均衡表初心者用講習会のお知らせ

10月22日、11月26日午後7時から9時まで、場所は貸し会議室「内海」（住所：東京都千代田区三崎町3-6-15）、詳しくはホームページ参照のこと。

一目均衡表公式ホームページ

<http://ichimokusanjin.hpt.infoseek.co.jp/index.html>



一目均衡表講座

経済変動総研
細田哲生

もみ合い相場の変動と時間関係を整理することが重要に

■ 均衡表と実線の交わりはもみ合い放れの重要なポイント

一目均衡表と波動論は、決して切り離すことの出来ない、深い関わりがあります。

前回、均衡表の、5本の線のうち、転換線、基準線、先行スパン（過去52日間の半値を26日先行させたもの）について説明しましたが、これらは、それぞれ短、中、長期における半値関係でありまして、半値戻し、半値押しという経験則を知っていれば、理解するのは容易だと思います。この3本は短、中、長期における押し、戻りのポイント（あるいは限界）を見るべきものである、ということです。

今回解説する、遅行スパン、先行スパン（基準線と転換線の半値を26日先行させたもの）も明確な目的があります

が、これを理解するためには「もみ合い相場とはどのような相場変動か」「もみ合い相場の時間関係」の2点を整理しておく必要があります。

Vol.3で相場変動を、動く相場と動かない相場に分けて、基本波動と中間波動について解説しましたが、動かない相場（中間波動P、Yなどを形成する変動）がもみ合い相場です。

もみ合い相場はある値段を中心として高値、安値を形成する図1のような変動ですが、もみ合いを形成している期間を限定して見れば、この中心となっている価格は、一種の相場水準になっているといえまして、この相場水準が動かないのです。

もみ合いの中心となる価格は、高値と安値の半値の位置にありますので、9日間の半値である転換線、26日間の半値である基準線、52日間の半値を26日ずらした先行スパンはそれぞれもみ合い相場の中心的価格になる可能性を常に持っていることは理解頂けると思います。これらの線がもみ合いの中心として働く場合は、当然押し、戻りとして機能していないことになります。

図2を御覧下さい。この3つの略図は基準線、転換線、先行スパンの値段が動かない変動がどういう変動であるかを表したものです。

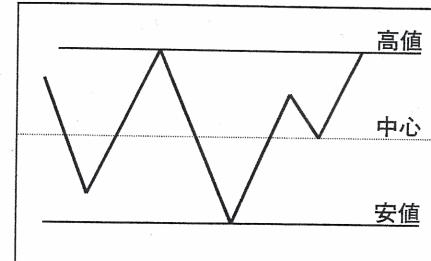
(1) は転換線が変動しない、もみ合い相場です。5日間の上げ、5日間の下げの繰り返しで高値、安値を超えない状

態を図に表したものですが、上げ、下げが5日以内であれば転換線は変動しません。この場合、基準線、2本の先行スパンともに転換線と同値で変動しません。

(2) は14日間の上げ、14日間の下げでもみ合う場合、基準線が変動しないことを表しています。上げ下げが14日以内であれば基準線は変動しませんが、5日以上であれば転換線は変動します。先行スパンも52日間の半値は変動しませんが、転換線と基準線の半値は変動します。

(3) は27日以内の上げ、27日以内の下

図1

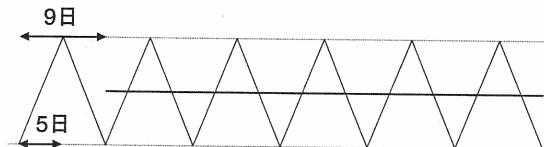


げで先行スパン（52日間の半値）が変動しないことを表しています。

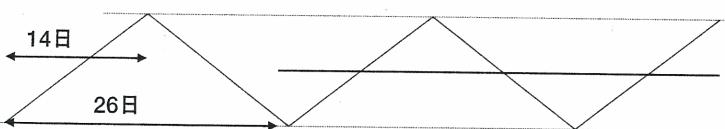
実際の変動はより複雑でありますが、もみ合いがやがて放れていくときにはこの中心的価格がもみ合い放れのポイントになります。もみ合いはやが

図2

1) 5日以内の変動（上げ下げ）で、もみ合いが続く場合の転換線

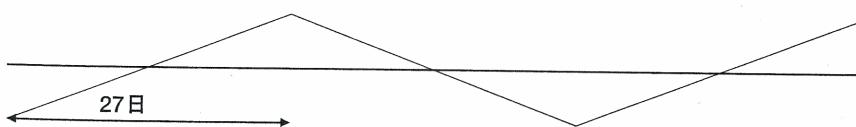


2) 14日以内の変動で、もみ合いが続く場合の基準線



3) 27日以内の変動で、もみ合いが続く場合の先行スパン下限

(52日間の半値を26日先行させたもの)



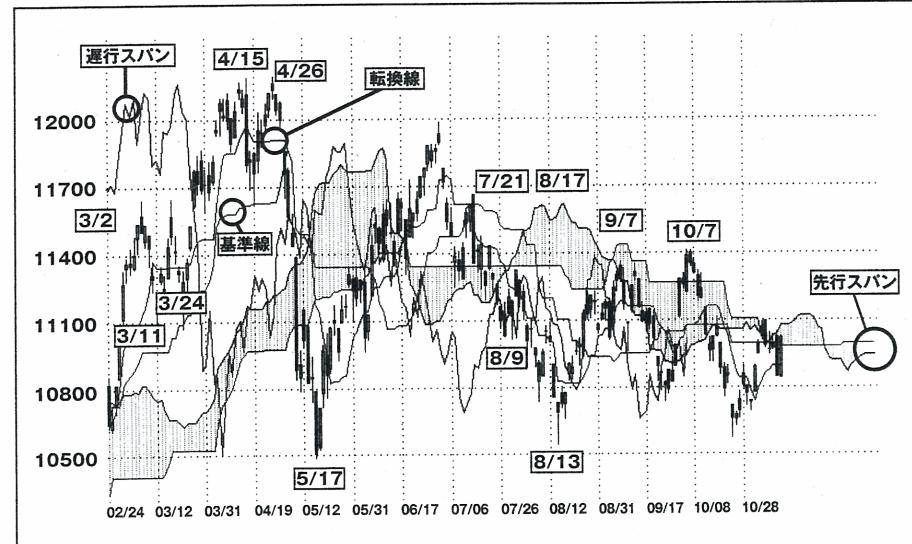
ては上げまたは下げとして3波動を構成していきますので、このもみ合い放れのポイントは押し、戻りのポイントでもあります。

■基本数値を利用して もみ合い放れを見分ける

もみ合い相場の時間関係については、波動論も含めて皆さん自身に研究して頂きたいのですが、ここでは基本数値について述べたいと思います。高値、安値からの基本数値が重要であることは既に理解頂いていると思いますが、もみ合い相場においても非常に面白い現れ方をするのです。

図3を御覧下さい。これは今年2月から11月はじめまでの平均株価日足の均衡表グラフであります。1万1340円前後の価格帯で転換線、基準線、先行スパン

図3 平均株価日足



ンが時期をずらして真横に（値段を変えずに）推移していることがわかります。

相場の実線はこの水準を上抜いたり、下抜いたりを繰り返していますので、3月2日から8月17日までは少なくとももみ合いを形成しているといえるでしょう。

この価格を実際につけた日は3月2日であります。この日を起点として日数を数えると、9日目が3月11日安値、17日目は3月24日で3月2日と同水準であります。

33日目は4月15日高値で、51日目は5月17日安値となり、97日目は7月21日で同水準、151日目は10月7日で同水準であると同時に直近での高値となっています。

このような例は非常に多いのであります。例えば8月9日を起点として見

るならば、9日目が8月13日安値、26日目が9月7日高値、51日目、65日目が8月9日と同水準であります。

つまりもみ合い相場の中心的価格をはじめてつけた日からの基本数値では、高値、安値または同水準になりやすいという傾向があるのです。

基本数値のうちもっとも重要な数の一つである26を追いかけたものが遅行スパンであります。基本数値で同水準の値をつけ、放っていく傾向を利用して、もみ合いの放れを見るわけです。実際には9、17、33、42、などもみ合いの規模に応じて数値は変えて良いと思いますが、26が基本であります。

ただし、この様な基本数値の活用方法は絶対的なものではありません。9、17、26、33、42、51という基本数値のうち、どの数が生きてくるのかは分かりませんし、高値、安値の頂点を形成するのか、同水準になるのかは分からないのであります。やはりこれまで何度も述べてきましたように、3波動の時間関係がはるかに重要です。

ですから「先行スパンの交差する日が変化日である」などという人がいますが、このような固定化はまちがいです。

一般的に先行スパンが交わる日は相場が高値、安値をつけるか、先行スパンの交差する価格と同水準になる場合が多いのですが、これは先行スパンの交差する価格を中心的な価格としてももみ合いを演じているということなのであって、想定している3波動の正しさ

を確かめる助けにはなりますが、このことだけで方向性を決定することは出来ないのであります。

さて先行スパン（転換線と基準線の半値を26日先行させたもの）ですが、これも遅行スパンと同様に、基本数値の特色を生かしているものです。遅行スパンが実際の相場の価格を使っていて、こちらは転換線と基準線の半値を一種の相場水準として見ていてあります。均衡表では基準線と転換線の位置関係の変化を一種の転換と見なしますが、基準線と転換線の交わりは過去26日間の相場変動がもみ合いであったことを示唆するものであり、このことと併せて理解いただけたいと思います。

一目均衡表のグラフには慣れていたことがある人が多いと思いますが、はじめのうちはごく単純に押し、戻りのポイントとして見るのが良いと思います。3波動の時間関係と併せて理解されたならば、今度は相場の中心的な価格としてはどうかを見るようにして下さい。次回は先送りについて、計算値について説明します。誌面が許せば変化日についても述べたいと思います。

● 勉強会のお知らせ

平均株価の勉強会を2005年1月21日と2月18日の午後7時から9時に開催します。また、初心者向け勉強会を同年3月5日の午後1時から5時まで開催します。場所などの問い合わせは0423-96-4383までお願いします。

一目均衡表公式ホームページ

<http://ichimokusanjin.hp.infoseek.co.jp/index.html>